

「七月のキノコ(5)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

サルノコシカケの仲間のキノコには、子実体が何年間も生き続けて、年輪までできるものもある。一方でたった1日で成長を終え「自ら消滅」してしまう、実に短命なキノコも存在する。



それは「ヒトヨタケ」というキノコだ。漢字では「一夜茸」と書く。大げさな名称ではなく、本当に一昼夜で消えてしまうキノコなのだ。ヒトヨタケはかつては「ヒトヨタケ科」に分類されていたが、現在は「ナヨタケ科」に入っている。どのキノコも子実体成長が異常に速く、短命なものが多い。若い子実体は、上の写真のように半球型の傘で、色も明るいクリーム色だ。少しずつ発生せずに、100本ほどが一気に成長するのが特徴だ。



半日後の夕方に見に行くと、姿が劇的に変わっていた。全体的に黒っぽくなって、傘が外側に反り返っている。朝のものと同じキノコには見えない。



10分ぐらいじっと見ていると、徐々に傘が外側に反り返って、黒くなっていくのがわかる。キノコの「頂上」にとまっているのは「キノコバエ」である。キノコバエはキノコに卵を産んで、幼虫は子実体の中で育つ。しかしヒトヨタケに卵を産んでも意味がない。



翌朝は雨になった。ヒトヨタケは黒くなって「溶けだして」いた。黒っぽく見えるのは胞子が作られたからである。胞子が成熟すると傘が溶けてしまうのだ。



普通のキノコは、傘の裏側のヒダで作った胞子を風で飛ばす。ヒトヨタケは「自己溶解」という手段で、雨水に乗せて胞子を拡散させる。必ず雨の前の日に発生して大急ぎで成長し、雨の日に溶けて消えるのだ。